そして俺は諦めた

たなかまもる

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ごく一般高校に通う高校２年生川上健太。
そこの仲間たちと過ごす日常が川上健太に
とある何かを諦めさせるお話。

目　次

普通の日常 ―――― 1
そんな事…あるのか… ―――― 9

普通の日常

今となればあれは青春の1ページだったと思う。

これは一般高校生　川上健太の物語。

眠たい目を擦り、毎朝起きる。
起床後のルーティンを作業の様にこなし
今日もだるい一日が始まる。
親からは「遅刻するから急ぎなさい」
と耳にタコができるくらい聞いた言葉だ。
昨日、乱雑に脱ぎ捨てた制服は
綺麗に畳まれており、今考えると
親がシワを伸ばして綺麗に畳んでくれて
いたんだと感謝と申し訳なさがある…

綺麗になった制服を身にまとい
決まったルートで登校する。
「今日は暑いな…学校ついたらアイス買お…」
そんな事を口に出しながら歩いていると、
「あっ！川上くん！おはよぉ～!!」
後ろから声が聞こえる
「おはよ、相変わらず朝から元気だな…」
俺はだるそうに挨拶をする。
彼女の名前は如月未来。
同じクラスのスポーツ大好き元気っ子だ。
「朝からそんなに元気無いと
今日という日が勿体ないよ!!
せっかく太陽浴びて光合成出来てるんだから
お恵みに感謝しなきゃ!!!」
「俺は植物じゃねぇよ…」
わかってくれたと思うが…
こいつは勉強はできるし、単語も覚えるが…

意味を理解出来ない運動一筋の絵に書いたような
スポーツ少女なのだ…
「だとしたら光合成してる分
植物の方がお恵みに感謝してるね！
川上くんは植物よりも…」
「うるせぇ…」
こいつの相手は疲れる…
と思い半ば強引に話を遮った。
「あっそ！遅刻しても知らないからねーだ！」
と言い残し自転車顔負けの速度で走っていった。
えっ？と思いつつ携帯の画面を見ると
「まじ…？」
遅刻までのカウントダウンは始まっていた。

予鈴が聞こえる…

「はぁはぁはぁ…」

教室に続く階段を駆け上がり、息も切れながら
間に合ったと思い教室のドアに手をかけようとした時
「おい、川上」
野太い男の声が聞こえた。
「あっ…はい…」
声の正体は担任の先生だった…
「川上、遅刻な…」

「うす…すみません」
(間に合ったと思ったのに…)
アイス食えなかったなぁと
考えながら適当に返事をした。
「後で生徒指導室に来るように。
早く教室に入れ。ホームルーム始めるぞ。」
面倒だな…と思い席に着いた俺に
「健太が遅刻なんて珍しいじゃん!!
なんだ?女に振られたか???ｗｗｗ」

煽るように声をかけてきた奴がいた。
「俺が女に振られる??
冗談じゃない…俺が女に振られるほど
モテたの見たことあるか??」
「ねぇな！あはは!!」
「そこ！松野！静かにしろ！」
「うぃーす」
今先生に注意された奴は松野　弘樹。
俺の親友だ。クラスでは人気者の男子。
サッカー部でエース。
良くあるモテる部類の奴だ。

「えー今日は5時限目に先週やった
テストの返却をする。赤点を取った生徒は
放課後この教室で追試を受けてもらうから
残るように。」

「ええっ!!」
教室にそれなりの声量で叫んだ女の子がいた。
如月未来だ。
自分で思ってるよりも大きい声が出たことに
驚いたのか自分の口を塞いでる。

(相変わらず元気だなぁ…)
なんて思いながら今日もいつもと同じ様に
過ごそうと考えていた。

午前の授業を終えお昼休み。
俺は弘樹と弁当を食っていた。
「健太よぉ…今日学校終わったら
カラオケ行かね???なんか思いっきり
歌いたい気分なんだわ!!!」
「奢りなら行く」
「うぉまじか…最近部活忙しくて

バイト全然出来てなくてなぁ…
金がねぇよ…」
「冗談だ、行こう」
「奢りか!!??」
「何故？Ｗｈｙ？」
この流れでなぜ奢ることになる。
なんて思いながら話していたら
「わ、私、大会近いのに
テスト赤点だったらどうしよう…」
朝とは違う元気の無い声が聞こえてきた。
「え～、未来は大丈夫でしょ～
今回のは一緒に勉強もしてたし大丈夫だよ！」
「だといいけど…」
今、大丈夫と励ましていた女の子は
天音しずく。弘樹の彼女だ。
吹奏楽部に入っていてよくコンクールにも出ている。
「でも一応追試の勉強少ししとく…？」

天音がそう呟いた。
「しずくちゃん…ありがとう…って
さっき私なら大丈夫って言ってくれてたよね!?」
「あははははは」
何となく聞き耳立てて聞いていた会話が
漫才のようで思わず小さく笑ってしまった。
「どうした?思い出し笑い?
今の健太なかなか気持ち悪かったぞ…」
「えっ、酷くない?」

キーンコーンカーンコーン

予鈴が響き各々自分の席に戻り始める。
5時限目が始まりこれから起こる出来事を
俺は予想すらしていなかった…。

そんな事…あるのか…

ガラガラ
「よーし授業始めるぞー日直ー」
キリツキヨツケレイ
授業が始まる前の毎日行う挨拶
正直２年弱やってると適当になってしまう
「えー今日の朝のホームルームで担任の先生に
言われてると思いますが、今日はテスト返却です。
赤点を取った生徒はこの教室で追試です。
さてテスト返して行くぞー」
一人一人名前を呼ばれていく
「天音ー」「如月ー」「松野ー」ｅｔｃ……
ハーイ　ハイ！　ウース
「健太、お前何点だったよ??
俺は８６点！勉強してよかったわぁ」

「…ないんだ」
「え？なに??」
「俺…呼ばれてないんだ…」
「まじ？」
「まじ」
　すると先生が
「あっ、そうだ…今回のテスト
　名前記入されていない生徒がいたので
　自分だと思う者は後で職員室まで来なさい」
　と、先生が俺にバッチリ目を合わせて言っていた…
「どうして…」
「どうして…」
　そうつぶやくと同じタイミングで
　俺の斜め後ろの女の子も呟いていた
「赤点…取っちゃった…どうしよう…」
「んー取っちゃった物はしょうがないから
　追試1発で合格して部活に速攻もどるしかないね」

如月と天音が２人で今後の対策を話していた
キーンコーンカーンコーン
授業終わりの予鈴がなる
キリツキヨツケレイ
アリガトウゴサイマシター

「今日もこれで終わり…
あとは帰るだけ…って帰れないんだった…」
遅刻とテストの件で職員室の後生徒指導室までも
行かなければならなかった
「弘樹ーごめん！
今日カラオケ行けねぇーわ…」
「まぁ！しょうがねーよ！
また次行こうぜ!!!俺帰るわっ！お疲れ！」
「おうまた明日なー」
と見送ってたら天音しずくの方へ向かっていった
「あっ、忘れてたあいつら付き合ってたな…」

彼女持ちはいいですね～なんて思いながら
教室を後にし職員室に向かう…
「はぁ憂鬱…」
声に出ていたらしい…
それを聞かれていたのか後ろから声をかけられる
「川上くん!どこ行くの???」
「職員室だよ、呼ばれてんの」
「それ終わったらすぐ教室に戻ってきて!!
頼みたい事があるから!!!お願いね!!!」
と言って自転車顔負けの速度で走っていった
うん、如月だ
(説教だから何時間かかるかわからんぞ…)
なんて思いながら職員室のドアをノックした
ガラガラ
「失礼します」
「おぉ、来たか。まとめて話すから
生徒指導室行くぞ。」

「はい。」
生徒指導室に到着し、話し始める
その話は小一時間かかっていたであろう…
「はい。すみませんでした。以後気をつけます。
それでは失礼します。」
長い話がようやく終わり
ふと先程言われた事を思い出す
（あっ、俺如月に呼ばれてたんだ…）
俺は少し急ぎ足で教室へと向かった。
そこには…
見るからにどんよりしたオーラを放つ
如月がいた。
「如月…悪い遅れた…」
「川上くん…マジで遅い…
追試…多分また赤点取っちゃったよ…」
「いやそれと俺にどんな関係があるんだよ…
俺は指導されてたから後日追試だし…

そもそもお前天音に勉強教えて貰って…」
と、ふと思い出す
（あ、天音　弘樹と帰ったわ…）
「お前もしかしてノー勉？」
「うん、しずくちゃん教えてくれるって
言ってたのに帰っちゃうんだもん…
それで考えて同じ内容の追試受けるし
川上くんに教えてもらおうかなと思って…」
「同じ追試して先に受けたやつに
問題聞いたらカンニングになるだろ…
それよりそう言う事は先に話せ…
聞いてたらノートでも貸してやったのに…」
「ううう…多分赤点取っちゃったから来週の
追試まで部活禁止になっちゃうだろうし、
来週は必ず回避しなきゃ…」
如月は不安そうな顔をして俯いているが
俺には何も出来ないな…と帰ろうとすると

「川上くん…私に勉強教えてくれない…？」
「今…なんて言った？
俺に勉強を教えろと言ったかね？」
「うん。」
「嫌だ」
「なんで…？」
「バカが移る」
「えっ、酷い…」
「はぁ…冗談だよ…
その代わりしっかり勉強見てやるから
覚えろよ???」
「うん!!!ありがとう!!!川上くん!!!
今日って予定ある？無いなら勉強見てほしいなぁ…」

早速か…と思いながら軽く頷き
何処で勉強するかを聞くと…
「私の家!!!」

「なんっだとっ…」
初の女の子の家に招かれ
困惑しつつ如月の家に向かう
如月がそろそろ家だよーと声を出したから
顔をあげると…
「嘘だろ…」
そこには自分が住んでる団地が見えた…
「ここの3階!!行こっ!」
「ちょっと待て」
「ん??どうしたの??」
首を傾けこっちを見てくる
「ここ…俺の家…ここの2階…」
「えっ!?嘘っ!?」
衝撃の事実に2人ともポカーンとしていたのだった